

増上寺は、小田原道（後の東海道）を攻め下ってきた軍勢が、江戸城総攻撃を前に、最後に渡河を行う場所を見下ろせる絶好のポジションにある。

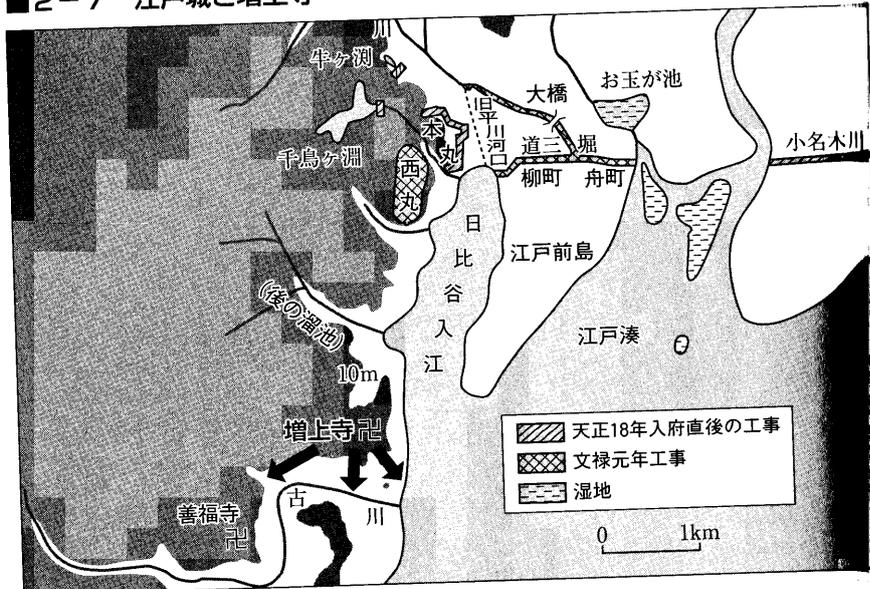
・・・

増上寺が敵の手に落ちれば、江戸城まで地形的に遮るものがほとんどないので、増上寺は江戸城南側の最も重要な拠点であった。

家康は、慶長3年の時点では豊臣方を最大の仮想敵としていたが、当時の政治情勢のなかでは、本拠地にいきなり強力な城砦を築くことによる軋轢は避けるのがベターだったろう。

それゆえ、菩提寺の建立を口実にして、自然地形を活かす形で有事の際には直ちに防御拠点になる増上寺を整備したのであった。

■2-7 江戸城と増上寺



※鈴木浩三『江戸の都市力』筑摩書房より。

ここでいう「町人」とは、地主や家持階級のことである。地借（借りた土地に建てた家にすむ人）、店借（賃貸に住む人）は、当時の法制上は町人ではなかった。

・・・

一方、当時は地主（町人）になるには、その町の地主すべての同意が必要だった。カネがあるだけでは地主＝町人にはなれなかった。信用が不可欠だったのである。それは、諸組合や株仲間への新規加入でも同様だった。

町や同業組合といった組織・団体に新規に加入する際には、既存のメンバーや関係者を饗応して、加入者を認知してもらう手続きであり儀式であった「弘(ひろ)メ」が必要だった。「披露目」「広め」とも書く。現在の結婚披露宴もその名残である。

地主一同から地主になることを認められて、土地の売買契約となり、弘メの手続きが終わると、その事実が「沽券(こけん)」に記載された。

それゆえ、沽券状は、登記的な意味や財産価値を超えて、地主の全人格的な信用を象徴したのであった。

外濠は埋め立てられ「外堀通り」に

江戸前島を縦貫する形で開削された外濠は、湊と水路を兼ね、戦前までは江戸・東京の主要な水運ルートになっていた。

しかし太平洋戦争後、米軍の空襲によって発生した大量の瓦礫を急いで処理するように連合軍司令部（GHQ）から指示された東京都は、てっとり早く外濠に投棄することを決定した。

昭和 24 年（1949）に呉服橋から鍛冶橋などが埋め立てられ、昭和 34 年までには外濠のほとんどが姿を消した。

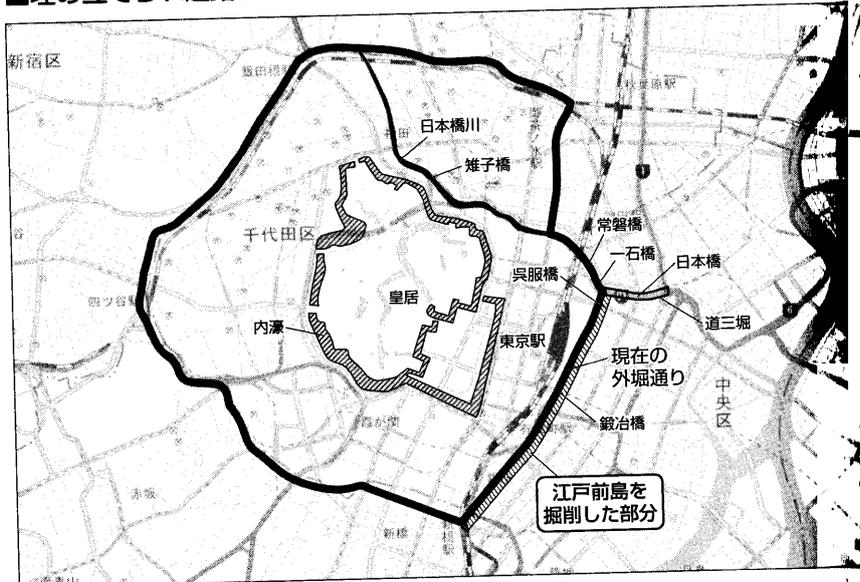
現在、外濠だったところの多くは外堀通りの一部として、東京の交通・流通の大動脈となっている。

東京駅八重洲口から中央通り方面を眺めると、外堀通りの幅の広さ、すなわち外濠の広さを実感できる。姿は変わったが、外濠も外堀通りも蓮戸・東京の交通網としての重要な機能を果たしていることには変わりはない。

「京都」は、当時の「研究開発都市」であり工業都市でもあった。

江戸では上方からの「下りもの」が珍重され、江戸や東国で生産された地廻り物は「下らないもの」とされていた。なかでも高級な織物、手工芸品、美術品などのほか、清酒も京都や伏見の周辺で生産されていた。

■埋め立てられ道路になった外濠



※地理院地図より作成。

●債権の決済を利用した為替のしくみ

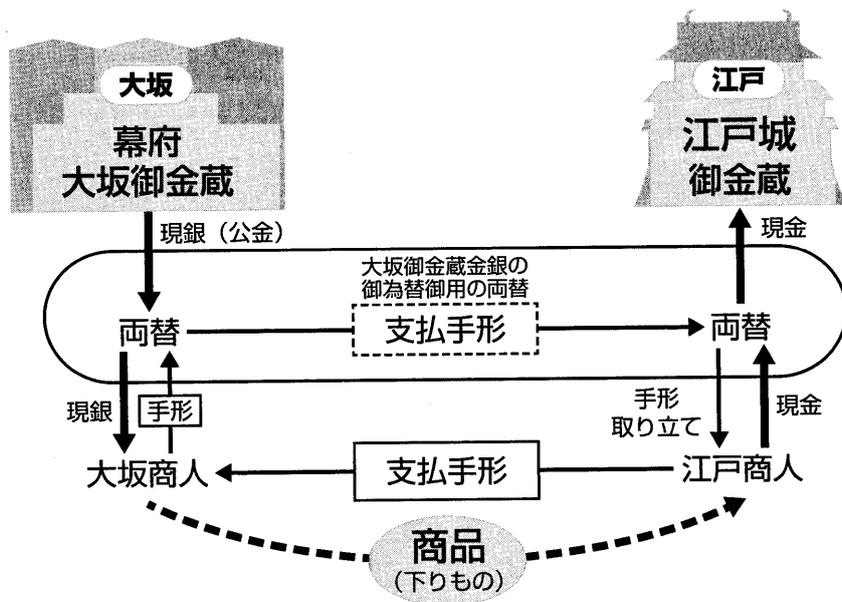
遠隔地間の決済手段として、為替も発達した。

当時の主な為替には、元禄4年(1691)に制度化された「公金為替」と、享保8年(1723)に始まった「江戸為替」があった。

「公金為替」は、幕府の大坂御金蔵から江戸城の御金蔵に輸送される現金と、江戸の商人から大坂の商人に送る商品代金を相殺するものだった。

しくみは、大坂商人から購入した商品の代金を江戸商人が手形で支払い、その手形を大坂商人は両替(大坂御金蔵金銀の御為替御用)で換金(換銀)した。その換銀資金には大坂御金蔵で受領した公金があてられた。支払手形は江戸に送られ、江戸の御為替御用の両替が江戸商人から代金を取り立て、そのお金を江戸の御金蔵に納入するというものだった(図8-2)。

■ 8-2 公金為替のしくみ



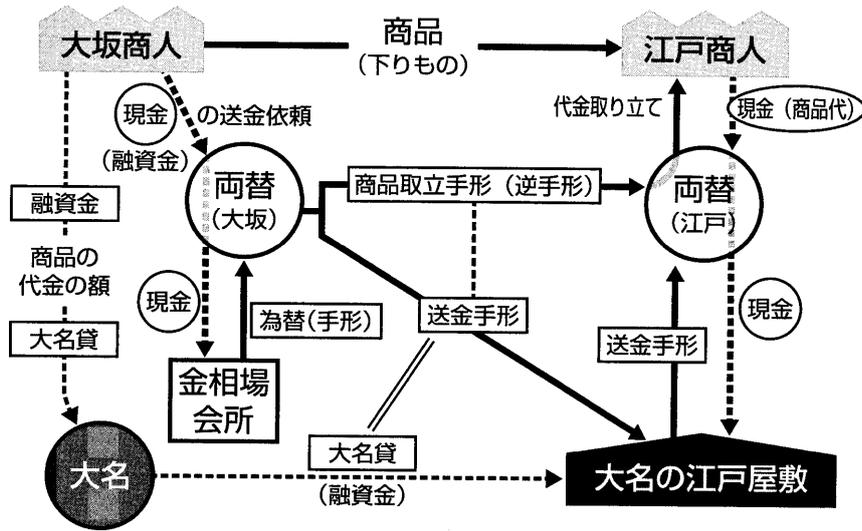
御為替御用の両替は、大坂で受領した現金（銀）を 90 日以内に江戸城御金蔵に現金で納入すればよく、その間は無利息とされていたので、大坂や京都で運用して巨利を得た。また、銀と金の為替差益も大きかった。

「江戸為替」では、まず下りものを荷受けする江戸商人に対して大坂商人が持つ債権（商品代金）を、大坂商人から大名の江戸屋敷への大名貸に充当する。そして、江戸から大坂への現金輸送に代えて為替で決済した。

実際には、大坂の両替が北浜の金相場会所で為替（手形）を購入し、大名の江戸屋敷には送金手形、取引先の江戸の両替には商品取立手形（逆手形）を送り、江戸の両替はこの取立手形で江戸の債務者（上方から荷受けする商人）から現金を取り立て、大名の江戸屋敷は送金為替をその両替に持ち込んで換金した（図 8-3）。

江戸・上方間でこれらの為替決済を行うために、三都の両替はそれぞれの金銀相場を通知しあった。

■ 8-3 江戸為替のしくみ



- 大坂商人は、江戸の商人に商品を売った代金を大名への貸付（融資金）として送金。

札差(ふださ)業は、旗本・御家人が幕府から支給される蔵米（現米）の現金化を請け負うことから始まった（図8-5）。

こうした依頼を札差にする旗本や御家人を、「札旦那(ふだだんな)」といった。

江戸では、現金（貨幣）がなければ生活できなかったからである。米以外の食料や、生活必需品のほとんどは銭で支払うものであった。

しかし、下級旗本や御家人といった零細な幕臣たちは、米価安が進んだこともあって、慢性的に窮乏するようになり、日々の生活費にも苦労した。

そのため、札旦那として現金化を依頼する立場から、支給予定の蔵米を担保に入れて、札差から借金をする立場に変わっていった。

...

一方、寛保(かんぼう)元年（1741）に年15%だった一般の金銭貸借の利率は、天保13年（1842）に年12%となり、それにもなって札差の利率も年10%に引き下げられた。

札差の利率を、市中金利よりも低くなるように設定したのであった。

ところが、公定金利に拘束されるのは札差だけであったため、架空の金主を仕立てて、そこから札差が金を借り、それを札旦那に融資する形が横行した。

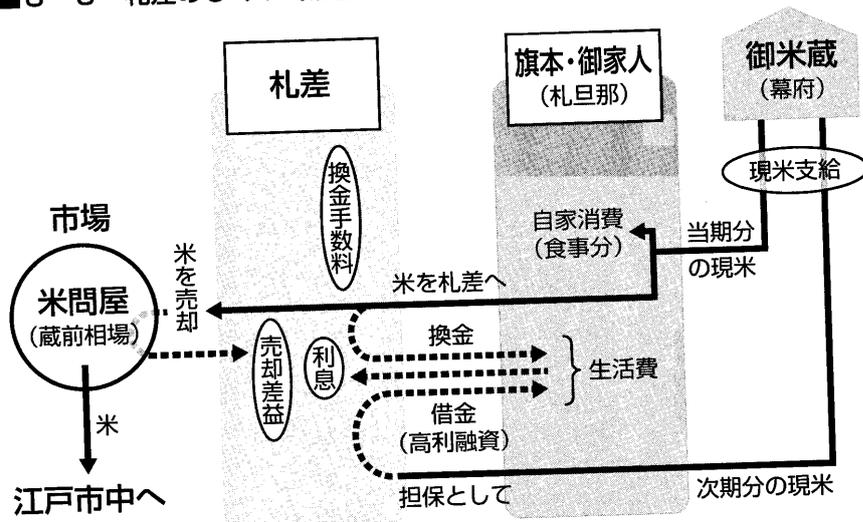
しかも、架空の金主からの融資を自分（札差本人）が世話（幹旋）したと称して、礼金なども取った。

さらに、返済に行き詰まった札旦那には、証文の「書換料」という名目で、同じ月の利息を二重に取った。これを「月踊り」といった。

...

一方、札差の収入で大きかったのは米の売買差益である。幕臣たちから蔵米を引き受けるときには買い叩き、市中に販売する時期になると供給量を絞って値をつり上げた。買うときは米価安、売るときは米価高に米市場をコントロールできたから大儲けできるのは当然だった。

■8-5 札差のしくみ (幕臣への金融)



• 札差は「売却差益」「利息」収入で利益を上げた